

# 人間の偽善を見抜くユーモアの感覚

——ドーア先生のご逝去を悼んで

稲上 毅

ロナルド・ドーア先生が2018年11月13日、長くお住まいだったボローニャの病院で亡くなった。93歳だった。呼吸困難を訴えられ、10日ほどのご入院であつたらしい。穏やかな死に顔だったと聞いている。

先生は米寿を迎えられたあとも、年に一度は来日され、安宿やシェアハウスにお泊まりだった。衣食住にはほとんど欲がなく、都心の高級マンションを講師宿舎に宛がわれると、居心地がよくないと不満を漏らされた。プロテスタントのイギリス人だったせいか、あるいは労働者階級の出身であったためか、先生はまったく美食家ではなかった。廉価のお寿司を食べては、ああ美味しかったとっていつも破顔された。しかし、こと学問の話、現下の国際情勢といったことになると、ユーモアを湛えた舌鋒が冴えた。曖昧な受け答えをしたり、相槌ばかり打っていると、意見はないのかと問い質された。

本誌の読者には、ドーア先生の学問的業績がいかに大きなものであったかについて贅言を要しないかもしれない。しかし、この機会にいくつかの雑感を記して先生の遺徳を偲び、今後の糧としたい。

まず、書き下ろしの単著だけを挙げてみよう。『都市の日本人』(1958年)を皮切りに、『日本の農地改革』(1959年)、『江戸時代の教育』(1965年)、『イギリスの工場・日本の工場』(1973年)、『学歴社会 新しい文明病 (1976年)』、『シノハタ』(1978年)、『日本型資本主義と市場主義の衝突』(2000年)と続き、そのあとも『誰のための会社にするか』(2006年)など数冊の新書をもものされ、最後に『幻滅』(2014年)と『不平譚——幻滅した親日家の沈黙思考』(2015年)を著した。

このうち、『都市の日本人』から『シノハタ』までの仕事には見落とせない共通点がある。第1

に、長期にわたるあるいは度重なる実地調査によって——『江戸時代の教育』では徹底した文献渉猟とその熟読吟味によって——、ときに複数の調査法を用いて揺るぎない経験的事実を明らかにした。しかもその場合、社会学者らしく、政治にも経済にも文化にも目配りしながら社会(関係、構造、機能)の性格を包括的に浮き彫りにした。

第2に、しばしば偽善と映る有力な理論や社会通念を強く意識しつつ事実発見に努め、結論としてその理論や通念を打ち砕き、新たなものの見方、考え方を提示した。高い峰『都市の日本人』でいえば、一方では単線的進化論(中心地の地理的国際移動を含む「後発効果」の視点がない素朴な進化論やマルクス主義)を、他方ではベネディクトの『菊と刀』のごとき日本文化に関する特殊性理論をふたつながら批判的検討の俎上に乗せ、敗戦の余燼冷めやらぬ日本の都市社会をただ「遅れた」「風変わりな」社会だと決めつけて憚らない安易な理論と通念を丁寧に調べ上げた事実によって融解し、内外識者の蒙を啓いた。

この作品には、すでに儒教倫理についての斬新な定義がその顔を覗かせているが、それだけでなく、貧しく苦しい庶民生活のなかに「笑顔の絶えない」小さな社会が息づいていることを温かなまなざしで描写し、読む人の心を和ませた。

その儒教倫理とは何か。学問と教育の重視であり、公益への貢献という政治的関心であり、集合体への忠誠心(盲目的忠誠のみならず、「真の忠臣・忠義」を含む)であり、生産倫理の尊重だった。儒教倫理は、このように両義的であるにもかかわらず、それを封建遺制の精神的支柱だと決めつけ、その内容と文脈を特定せずに全称否定してしまうようなものではなかった。明治維新の「富国」「強兵」という語彙結合がその両義性を象徴して

いるというのがドーアの見方だった。

第3に、こうした稀有な達成を方法的に支えていたのが、日英比較を基本とする国際比較の視点であり、また「人間の偽善を見抜くユーモアの感覚」であった。最大かつ真正の偽善といえ、それはイデオロギーであり、「先進的」理論モデルであり、それを吹聴するメディアの風説であるにちがいない。人を偽善に誘う甘美な言葉には危うい麻酔薬が含まれている。だから、「とにかく実態を見る必要がある」(柳原和子「日本学者 R・ドーアの戦後 50 年」『中央公論』1995 年 7 月号)。

ドーアのこうした基本姿勢は他の作品でも踏襲されている。なかでも刮目すべきは『イギリスの工場・日本の工場』。一方では衰弱していく母国のイギリス病、他方では日本の目覚ましい経済発展。その好対照の図柄を因果的にどう説明し、またいかなる将来像を描くことができるか。生産倫理・人材育成・公益重視の儒教倫理にもとづく会社経営と経済発展、「封建社会から一挙に大組織社会へ移行した」急激な日本の工業化とそれがもたらす制度形成、ヴェブレンに遡及する技術移転による後発効果と中心地の地理的移動を含む新たな国際的社会進化への展望が描き出された。しかも、この雇用慣行や労使関係に関する日英比較研究の主要な結論のひとつは、「後進」イギリスが「先進」日本に近づいていくという衝撃的なものだった。

こうしたドーアの解釈図式が、日本に後続した韓国、台湾、中国、東南アジアの国々のそれぞれに個性的に経済成長プロセスを理解し、また第4世界や最貧国の将来を見通すうえでどれほど役に立つのか、注意深く見極めていかなければならない。ますます加速していく「圧縮された」工業化あるいは経済発展の先にいったい何が待ち構えているのか——、ふとそう考えてしまう(拙稿『いまの社会、明日の社会』をみる視点——インダストリアルリズム再訪』連帯社会研究交流センター「連帯社会」連続講座、2018 年 1 月 27 日参照)。

冷戦構造が瓦解し、日本でバブルが弾けた 90 年代になると、ポスト工業社会に暗雲が垂れ込めた。金融化、グローバル化、ネオ・アメリカ化の大風が吹きはじめ、中国では社会主義市場経済の

歯車が回転しはじめた。「歴史の終わり」ではなかったが、まずは「資本主義対資本主義」の時代になった。時代に寄り添うドーアの表情が厳しくなった。親日家から知日家へ、そして知日家から嫌日家への変身を余儀なくされたという自覚が高まった(『幻滅』参照)。金融化とネオ・リベラリズムの影響に強い懸念を抱くようになったからである。まず巨視的に『日本型資本主義と市場主義の衝突』を上梓し、ついで微視的に日本企業のコーポレート・ガバナンスの変貌ぶりに迫った。リーマン・ショックに先立って出版された『誰のための会社にするか』のなかで、ドーアは 21 世紀初頭、日本で「株主革命」が起きたと結論づけた。この大胆な仮説には吟味すべき論点が残されているが、「労働者株主」が大量に登場したことは否めない。今後、その存在と発言力は日本の産業社会に何をもたらすだろうか。

ドーアの青々とした森は大きく深い。そのあまり知られていない仕事のなかに国際政治にかんする時宜を得たシャープな評論がある。戦争を含むすべての暴力の 13 世紀以降の超長期的衰退傾向を主張するスティーヴン・ピンカーの『暴力の人類史』を取り上げて批判的に論評した『不平譚』の最終章「人間の進歩か?」の末尾でドーアはこう記している——、ウィーン会議(1815 年)、ヴェルサイユ会議(1919 年)、サンフランシスコ会議(1945 年)という 3 つの貴重な経験を積み重ねることで、人類は戦争の勝者と敗者を対等に取り扱う国際秩序システム構築への歩みを続けてきた。しかし、いま 21 世紀のはじめ、新冷戦構造の生成が懸念されるなかで、「第 4 の決定的な一歩は、世界のヘゲモニーをめぐるもうひとつの破壊的戦争のあとにしか訪れないのだろうか」と。

「人間にそんな違いがあるはずはない」とお考えだったドーア先生の成し遂げた偉業は、これからも末永く国境を越え、世代を超えて読み継がれていくことだろう。いまはただ、ようやく永遠の安らぎを手にしたドーア先生に深く頭を垂れ、有り難うございました、さようなら、といわなければならないのだろう。

(いながみ・たけし 東京大学名誉教授)